

関西外国語大学留学生別科 35年の歩み —主にこの15年をふりかえって—

鹿浦 佳子

要旨

関西外国語大学留学生別科（以後別科）は創立35年を経た。1992年に小山（1992）が創立から1992年までの歩みをまとめているのを引き継ぎ、ここでは主にその後15年の別科の変遷（留学生の学生数、レベル、専門、日本語教員、日本語カリキュラム、日本語クラスの時間割、留学生の環境など）や動向を報告、今後の指針としたい。

【キーワード】 関西外国語大学留学生別科、別科の変遷、留学生、留学生数、レベル、留学生の専門、日本語教員、日本語カリキュラム、日本語時間割、留学生の環境

1. はじめに

本学の留学生別科は1968年8月夏季セミナーに米国アーカンソー大学から19名の学生を受け入れたことから国際交流が始まった。その後も夏季休暇を利用して主に米国の大学との間で受け入れ・派遣を相互に実施し、交流を続けてきた。1972年からはアジア研究セミナーとして通年留学生を受け入れ、日本語およびアジア研究の授業が開講されるようになった。1976年にはこのアジア研究セミナーが留学生別科という名称になり、発足し、以来今日まで留学生数は増加の一途をたどっている。

本学留学生別科の受け入れの特徴として次のようなことがあげられる。

1. 受け入れのほとんどが交換学生である。（ほぼ同数の日本人学生が本学から提携校に派遣されている。）交換提携校は現在50カ国・地域、294大学、05/06年度の留学生数は668人である。交換学生以外の個人での留学は1割弱である。
2. 本国の大学に在籍していて本学で履修した科目を卒業科目として持ち帰る、いわゆるジュニア・イヤー・アブロードの3、4年生の学生がほとんどである。

3. 留学期間は短期留学で1年、1学期と選択でき、学期制もアメリカ等に合わせて9月開始の秋学期と2月始まりの春学期がある。
4. 必須の日本語以外はすべて英語で授業が行われるため英語を母国語とするか、講義に困らないだけの英語力(TOEFL 500以上)を持つものしか入学が許可されない。

2. 学生の変化

2.1 学生数

米国をはじめ秋学期に新学期が始まる学期制の国からの留学生が多く、外大で秋学期に学習を始め1年、または1学期滞在する学生が主であるが、春学期に新学期が始まるオーストラリアや韓国は春学期に来日する。秋学期に外大での学習を始め、春学期にまで滞在を延長し、帰国する学生が主流である。年度別(学期別)受け入れ学生数と日本語教員の推移は表1・図1にある。

秋学期に来日する学生のうち、2学期目も継続して滞在する学生は約50%を占め、春学期に来日する学生の約20%が秋学期まで滞在している。毎年、3学期、つまり一年以上滞在する学生や一学期・一年外大に滞在し、帰国した後、再度来日する学生も中にはいる。2学期目も滞在を希望する場合、判定会議を経て一定以上の成績と教員の推薦が得られなければ継続が認められない。

2.2 学生の国籍

表2で示されるように90/91年までは、米国からの学生が一番多く、全体の90%以上を占め、2位がイギリスであった。現在でも米国の学生数が一番多いことに変わりはないが、90/91年度は全体の91.2%、95/96年度は69.6%、00/01年度は58.3%、05/06年度は55%とその割合は減少してきた。90/91年度は第1位の米国と第2位の英国を合わせると全体の96%も占めていたが、その後国籍が多様化して、第2位の英国にオーストラリアが取って代わり、第3位は北欧のスウェーデンと国が変わってきた。05/06年度では学生の45%の300人が49カ国・地域の101大学から来ており、その国籍の多様化は著しい。出身地域で見ると最近10年の学生は、1位北アメリカ約60%、2位オセアニア約10%、3位ヨーロッパ20%、5位アジア圏で5%、6位中南米5%になる。同じレベルでクラス分けをする際は、同じ国籍・大学の学生を避け、男女比ができるだけ同じになるよう心がけている。

国籍が多様化した長所は、初級クラスでも各国の様子を発表・話し合いをさせること

が出来るし、上級のディスカッションのクラスでも広く深く議論が出来、教育の上でも役に立っている。授業以外で留学生間の国際交流がさかんになっている。短所としては、教員が学生の国についての知識、情報がない場合が多く、その場合学生の間違いの検証ができないことである。また、宗教、主義も多様化し、例えば設定した試験の日は外出禁止で試験が受けられないから後にしてほしいという要請に対しては、受け入れざるを得ないこともあった。

表2 学生の出身国の推移

人 \ 年度	90/91	95/96	00/01	05/06
アメリカ	330(91.2%)	245(69.6%)	243(58.3%)	368(55.1%)
オーストラリア	3(0.8%)	61(17.3%)	54(12.9%)	55(8.2%)
スウェーデン	3(0.8%)	11(3.1%)	15(3.6%)	36(5.4)
カナダ	1(0.3%)	5(1.4%)	20(4.8%)	20(3%)
オランダ	0	1(0.3%)	12(2.9%)	15(2.2%)
イギリス	17(4.7%)	10(2.8%)	8(1.9%)	13(1.9%)
ノルウェー	0	0	2(0.5%)	13(1.9%)
メキシコ	0	0	6(1.4%)	13(1.9%)
フランス	2(0.6%)	2(0.6%)	7(1.7%)	12(1.8%)
韓国	0	0	5(1.2%)	11(1.6%)
フィンランド	0	1(0.3%)	4(1%)	9(1.3%)
香港	0	0	4(1%)	8(1.2%)
ドイツ	0	2(0.6%)	2(0.5%)	7(1.0%)
アルゼンチン	0	0	6(1.4%)	7(1.0%)
イタリア	1(0.3%)	0	0	6(0.9%)
シンガポール	0	3(0.9%)	0	6(0.9%)
エクアドル	0	1(0.3%)	2(0.5%)	6(0.9%)
台湾	0	0	4(1%)	5(0.7%)
デンマーク	5(1%)	0	4(1%)	5(0.7%)
コロンビア	0	0	2(0.5%)	5(0.7%)
ベルギー	0	0	1(0.2%)	4(0.6%)
南アフリカ	0	0	2(0.5%)	4(0.6%)
スペイン	0	0	1(0.2%)	3(0.4%)
トルコ	0	0	0	3(0.4%)
レトアニア	0	0	3(0.7%)	3(0.4%)
ラトビア	0	0	0	3(0.4%)
ニュージーランド	0	9(2.6%)	4(1%)	3(0.4%)
ケニア	0	0	0	3(0.4%)
その他	0	1(0.3%)	6(1.4%)	22(3.3%)
合計	362	352	417	668

2.3 男女比

表3 学生の男女比の推移

	性別	81/82	86/87	90/91	95/96	00/01	05/06
全学年	男	46%	50%	50.5%	44%	50%	51%
	女	54	50%	49.5%	56%	50%	49%
日本語上級クラス	男	100%	69%	58%	56%	47%	35%
	女	0%	31%	42%	44%	53%	65%

男女比は表3に示すように全体の男女比はほぼ同率であるが、95/96年度あたりまで日本語上級クラスは男子学生の方が多かった。しかし、95/96年度以降、男女比は逆転し、女子学生が増加してきた。最上級のアカデミックジャパニーズは女子学生がほとんどである。

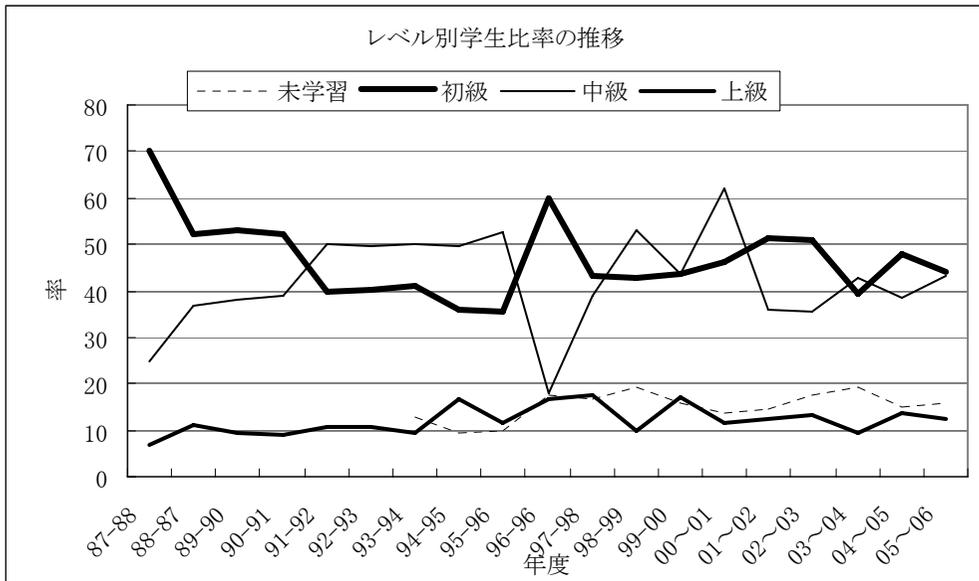
2.4 レベル別比と学習歴

留学生の日本語レベルは76年当初は別科に入学して初めて日本語を勉強するかほんのさわりだけを勉強してきたいわゆる初級の学習者が7～8割を占めていた。しかし、88年あたりから1～2年日本語を学習してきた中級の学習者が増え、90年代では初級と中級の割合が逆転した(大川他1998)。表4、図2で見られるようにその後2000年頃から、初級中級は大体同じ割合にそろってきた。3～4年日本語を学習してきた上級の学習者の割合は90年代に20%を超えるかと思われた時期もあるが、割合としては全体的に約10%と一定である。

表4 レベル別学生比率の推移

	87-88	88-87	89-90	90-91	91-92	92-93	93-94	94-95	95-96	96-96	97-98	98-99	99-00	00 01	01 ~ 02	02 ~ 03	03 ~ 04	04 ~ 05	05 ~ 06
未学 習								10	10	18	17	19	16	14	15	18	19	15	16
初級	70	52	53	52	40	40	41	36	36	60	43	43	44	46	52	51	39	48	44
中級	25	37	38	39	50	50	50	50	53	18	39	53	44	62	36	36	43	38	43
上級	7	11	10	9	11	11	10	17	12	17	17	10	17	12	12	13	9	14	12

図 2



当初は別科に来て初めて日本語を学習する学生が多く、81/82 年度に日本語の既習者は 4 割に満たなかったが、86/87 年度は 6 割に増え、91/92 年度には 8 割に達した（小山 1992）。今回の調査でもその傾向は続き、95/96 年度には春学期のレベル 1 のクラスは開講されなくなった事態が示すように既学習者は 9 割近くに達した。以来また日本語の未学習者が増加し、日本語の既学習者の割合は 8～9 割前後で落ち着いている。

2.5 専門分野

日本経済が成長するにつれて日本語学習者が増大し、学習者の専門にも大きく影響を与えてきた。90/91 年には初中級の学生の専門分野は政治経済関係の合計が 52%と半数以上をしめ、自然科学系その他がわずか 13%であった。（小山 1992）。今回 95/96 年の専門の資料が散逸しているので、00/01 年、05/06 年の資料を表 5 にまとめてみた。

表 5 学生の専門分野の推移

年度 \ 専門	90/91	00/01	05/06
日本アジア関係	28%	18%	25%
経済系	28%	28%	21%
政治国際関係	24%	9%	8%
自然科学	5%	2.4%	2.4%
その他	8%	42.6%	43.6%
不明、未定	7%		

日本経済のピーク時の 91 年を過ぎてからは、政治・経済を専門とする学生の割合が減少した。00 年度からその他の英語学、コンピューター科学、歴史、心理学、数学、哲学、生物、化学、コミュニケーション、映画、美術、グラフィックデザイン、など多岐にわたる分野を専門とする学生が日本語を学習するようになってきた。クラスで学生に聞くとアニメやまんがやビジュアル音楽に興味を持つ学生が非常に多くなってきたのも特徴である。日本に留学する学生の間口が広がり、専門でみるとピラミッドを形成しその裾野は日本語以外を専門としている学生によっているといえよう。

上級クラスの学生の専門を見ると日本語、日本研究が半数を占めるが、残りの半数は日本語に関係ないビジネス、国際ビジネス、数学、法学といった専門を持ちながら専門外の日本語学習を続けている学生である。

さすがに学習歴が長い最上級のアカデミックジャパニーズクラスになると、70%以上が日本語、日本研究の専門である。

2.6 日本人との交流

日本人との交流は、クラス内に日本人学生やホームステイの家族を招いてのディスカッションや敬語の練習を行ったり、日本にいるからこそ出来る日本語の練習をどのレベルにおいても取りいれている。

1998年9月に地域の枚方市教育委員会、ボランティアグループひまわりの支援を得て、日本語の授業の一環として枚方市の小学校との交流を始めた。1学期に一度会話のクラス単位で小学校へ赴き、子供たちと日本語で話し給食を食べ、書道、うどん作りなどの日本文化の一部も体験できるので学生の間でも好評であった。児童にも国際理解教育の一環として異文化と触れ合い将来豊かな国際感覚を養うのに役立っていた。残念ながら、訪問実施日に読み書きのクラスがある学生は訪問できなくなり、1時から日本研究・アジア研究のクラスがある学生も十分な交流が出来ないなどの問題が生じ、また留学生400人体制では小学校との連絡、調整が煩雑になり、06年の秋学期を最後に中止することになった。

当初から行われているホームステイプログラムでは学生は日本人家庭に滞在し、文化、習慣、日本語に毎日接することが出来、学生によってはめきめき日本語が上達したという事例も多く見られる。

3. プログラム

3.1 クラス

当初よりオリエンテーション時に行うプレースメントテストの結果によってクラス分けを行い、1 学期 15 週間で、7 週間目に中間試験、16 週目に期末試験を行っていることに変わらない。

日本語の授業は午前中で、スタジオアートの陶芸、墨絵を履修している学生は午前中にも授業があるが、日本語以外の授業は午後行われている。日本語会話 6 レベルと日本語読み書き 6 レベルに分かれていて、会話能力と読み書き能力に差がある学生に対しては別々のクラスを取ることができるよう配慮してある。

日本語会話は必須であるが、日本語読み書きは選択できる。会話の学生数は 1 クラス最大でも 14 名、全レベルの平均 12 名、読み書きの最大人数は 1 クラス 18 名を目安とし、全クラスの平均 15～6 名と少人数クラス制度を心がけている。時間は会話、読み書きの両方とっても週 400 分で、もっと日本語を勉強したいという学生が多く、90%以上の学生が読み書きも取っている。本国で同じ大学の同じクラスを取っていても、プレースメントの結果で違うクラスにプレースされると、本国でその文法はもう習ったから上のクラスに行きたい、またはクラスの同級生と比較して自分はいけなから下のクラスに移動したいなど、さまざまな要求を言ってくる。時差の影響や体調を考慮して、クラス分けの後、会話クラスは 2 週間、読み書きクラスは 3 週間以内で上のクラスに行きたい者にはまたテストを受けさせ、教師間でも連絡を取り合い、調整しさらに適当なクラスに配置する。

発足から、米国の大学に準じて JPN101、102、201、202、301、302、401（途中から開講）と呼んでいたが、学習者の日本語学習歴が何学期目かわかりづらいので、1998 年秋から日本語クラスの名称を変更し、JPN 1、JPN 2、JPN3、JPN4、JPN5、JPN6、JPN7 と呼ぶようになった。JPN7 は 1998 年秋までで消滅し、1999 年春学期からは代わりに新たなアカデミックジャパニーズが誕生した。日本語をもっと勉強したいという学生のために 1988 年春と 1989 年春に試みとして semi-intensive のクラスを 2 クラスずつ開講したが、教員の数に余裕がなく、以後行われていない。教員数の余裕と関係して、1992 年春学期から 1996 年春学期まで春学期の未学習者が少なく開講していなかったが、日本語プログラムがない大学からの春学期の受け入れが増え、97 年春から再開した。

会話は 50 分授業が週 5 コマ、読み書きは 3 コマある。基本的には月曜日から金曜日まで 1 日に 1 コマであるので、会話は毎日クラスがある。但し、上級クラスは話し合い

など集中して行いたい時には意図的に2コマ続ける場合がある。学生は教員に質問がある場合は、週2コマ教員が設定したオフィスアワーを利用できる。これは当初から変わっていない。50分1コマが1単位で会話が5単位、読み書きは3単位、日本語以外のアジア研究の科目（スタジオアートも含まれる）は3単位で学生は14単位以上17単位以内で履修登録をしなければならない。平均的な学生は日本語会話、読み書き、それにアジア研究2コースをとっている。最近ヨーロッパの経済専門の大学から日本語未学習で来ている学生の中で午後の経済の授業4つ取り、読み書きを取らない学生が目立ってきた。その学生もひらがな、カタカナは会話のクラスでは必須なので、読み書きを選択しなくても1単位の読み書き1を無料で取り、ひらがな、カタカナだけはマスターしてもらおう。レベル1, 2, 3では同じ教科書を使用しており、文法は会話クラスでのみ扱い、読み書きクラスでは会話のクラスで導入した文法を使った読み物を読み、作文を書くといった実際的な練習をし、文法説明は行わないので、いくら漢字能力が高くて読み書きクラスが会話のクラスより上にならないようにクラス分けを行っている。次の学期に継続希望する学生で、優秀な学生は教員の推薦を得た後休み中課題に対し準備し、次の学期始めのテストに合格すれば、1つ上のクラスに行けるジャンプテスト（飛び級制度）を設けている。したがって、初めの学期に会話が上で読み書きが下のレベルでも、休みに勉強してジャンプすれば、次の学期に両方のレベルがそろふことになる。

1999年春学期から上級301、302のさらに上のアカデミックジャパニーズクラスを開講した。4月に始まり7月に1学期が終わる Semester 制が取られていた穂谷キャンパスで4月から日本人の大学生のための講義が自由に取れるようになった。2月・3月は日本の大学のカリキュラムでは春休みのため、留学生別科で4月からのレギュラーコースの準備として、学生は論文の書き方、日本語読解、講義の聴き方の3つの準備コースを取って4月からのレギュラーコースに備えられる。レギュラーコースでは日本語で授業が行われる講義はほぼ履修できる。ノートが取れない、関西弁を話す先生の授業や理解できないなどの理由で学生が困った場合にも、助けてくれる日本人学生のアシスタントもつけている。

初めて留学して初めて日本語を学習するというレベル1の学生にとって、日本語会話の勉強についていくだけでも大変である。また卒業単位として自分の専門科目がたくさん必要だということで選択の読み書きクラスを取りたくても取れない学生もいる。会話クラスではひらがな・カタカナは読めて書ける必要があるので、そのような学生のために2000年秋学期から Introduction to Japanese Writing System という1単位のコースを作っ

た。このコースは普通の読み書きレベル1の中に組み込まれ、ひらがな、カタカナ、漢字 20 ぐらいを習得し 5 週間で終了する。上記の専門分野で、学習者の裾野が広がってきたと述べたように、各レベルにも格差が生まれレベル内でのピラミッドの裾野が広がりを見せ、以前は 15 週間で学習できた文法範囲が、だんだん消化しきれなくなり、カリキュラムの見直しを行ってきた。

特に初級のレベルでの個人差が激しくレベル1と2の中間の学生数が目立ってきた。1 学期や数週間の日本語学習者でレベル2には入れられず、かといってレベル1では未学習者と同じ1から始めるのは自尊心と動機を失わせるため、レベル1として少しの学習経験者のための特別レベルを設けていた。

当初カバーする課はレベル1より多くして、次学期継続する学生のためまた特別なレベル2を新設せねばならず教員の余裕がなくなり取りやめた。次の試みはスピードを上げ応用練習を加え、カバーする課の数はレベル1と同じにした。学生はエキストラの勉強をしたのに単位はレベル1と同じということに満足しなかった。そこで 2005 年秋学期からはレベル2の特別クラスに変更し、レベル1の初めから時間を長めに取り復習し、実際の授業もレベル1の後半の課から始め、レベル2がカバーする課より少し前で終わらせるようにし、現在うまくいっている。

2001 年春からそれまで読み書きレベル5と6を分けていたが、学生のニーズが時事問題、新聞読解や文学と様々なジャンルに渡りこれに教師が応えるために教員の負担が増えた。これを考慮し、レベル5と6を合同にし、ジャンル別の読み書き5・6コースを始めた。始めはニュースとフィクションの2コースで始めたが、その後3つめの日本の社会と文化関係の読み物を読んで、ディスカッションを行うというコースも加えた。2 レベルの学生を1クラスに入れるわけだが、それぞれの興味があるジャンルの文学やニュースに焦点をおいてそれだけをやりたいという強い動機があれば漢字や読解の能力が多少足りない留学生もクラスについて来られた。しかし、それぞれのコースには人数制限をする必要があるので、教務部の協力を得て留学生の希望を聞き、先着順のレジストレーションを行い、人数調整を行ってきたが、希望するジャンルが履修できない留学生もでるといふ欠点からこの試みも 2006 年秋から、元の読み書き5, 6に戻した。

3.2 時間割

時間割は 1997 年まで 9 時 10 分から 10 分の休憩をはさみ、12 時まで 3 時限しかなかったが、留学生の急増で 1997 年秋学期から 9 時 5 分始まりで 10 分ないし 15 分休憩を

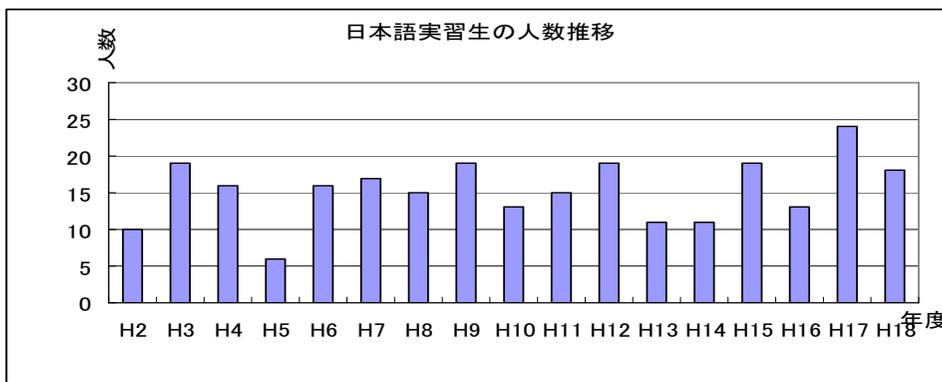
はさみ4時限授業で午後1時までとした。1998年にまた、9時10分から途中10分休憩で3時限行い12時までとした。

2000年秋学期にまた9時5分から1時まで休憩が10分ないし15分で4時限、1時に終わる時間割になったが、始まる時間が不規則でわかりづらく、翌2001年春学期から現行のスケジュールに落ち着いた。9時10分に始まり、休憩10分の4時限で1時にすべての日本語科のクラスが終わる。問題は休憩時間が10分と短いので授業が終わった後コンピュータの片付けをする教師と次の授業で使うコンピュータの準備をする教師同士で教卓の取り合いになることだ。解決方法としては、教室にデスクトップのコンピュータを設置するか、休憩時間を長くすることであるが、前者は経済的な問題があり、後者は1時からアジア研究の講義クラスがあるので、1時には終わらざるを得ないため問題解決には至っていない。

3.3 教員スタッフ

学生数が増えるにつれて教員数も増やす必要が出てくる。多くの日本語教育機関では非常勤講師の増減でこれに対応しているが、外大は専任を増やして対処する方法をとってきた。クラス担任制を取り、教育の質を上げるため1クラス少人数に制限しているので学生数が急増するとそれに対する急な教員の補充も必要となる。90年度からは学部副専攻で日本語教員養成課程を履修している日本人学生の教育実習も加わった。同時に交換留学の提携校へ日本語のT.A.(Teaching Assistant)として1~2年派遣されるインターシッピングプログラムもこれに加わり、実習生、インターン候補生の研修を専任が受け持つことになった。実習生の人数の推移は図3のようになる。

図3



実習生にとって初級レベルを受け持つのが普通であるが、H17年度の実習生が多い時は中級クラスを担当する実習生も出た。実習期間は秋学期2回、春学期1回それぞれ3週間にわたって実施される。インターン生は初年度の90年度は3名、95年度6名、00年度10名、05年度10名を研修後（90年度当初は研修は行っていない）に提携校（米国、スウェーデン、デンマーク、ハンガリー、エクアドル、ペルー）などにT.A.として送り込んできた。任期は1年が多いが、要請されてもう一年更新する場合が多い。また、大学院のコースを取りながら2年間教えられる提携校もあり、インターンシッププログラムの中では特に人気がある。教員は実習生、インターン候補生を監督、教育する負担があるが、実習生、インターン候補生は、実習・研修時に学生とのディスカッションや、大阪弁、若者言葉の講座を開くなど学生との日本語のふれあいの場としてのLanguage Tableを運営し、チューターとして学生を支援するなど学生に喜ばれている。実習まで残り、さらにインターンに派遣されるまでには、強い情熱と意志を持って高いハードルを乗り越えなければならない。

93年秋学期には初めての本校出身の専任教員が誕生した。99年秋学期には日本語教育副専攻を履修、実習を経て、インターンに派遣された経験のある外大出身の非常勤講師が誕生した。その後も本校出身の専任教員、非常勤教員が生まれている。

日本語教員の数の推移は図1にも載せたように81年度は専任4名、非常勤1名で各学期70名の学生に、86年度は専任8名で各学期150名の学生に、91年度は専任11名、非常勤1名で各学期250名の学生に日本語教育を行っていた。95年度は専任10名、非常勤2名で各学期250名の学生に、01年度には専任10名、非常勤5名で各学期300名の学生に、06年度は専任12名（内女性教員6名、男性教員6名）、非常勤7名（全員女性教員）で各学期400名の学生に日本語教育を行っている。男女の割合は女性教員が圧倒的に多かったが02年から男女比が同じになっている。教員は日本人が主だが、1989年秋学期は別科の日本語コースを終了して戻ってきたアメリカ人専任教員が誕生したこともある。

上述したように秋学期に来日する学生の方が春学期より多く、秋学期の方が学生数も多いのが普通であったが、00年度から春学期の方が秋学期より人数が多くなる逆転現象や秋学期とほぼ同数になる現象がおこってきた。春学期の2月から3月の間秋学期には開講されないアカデミックジャパニーズの準備コースを担当する教員が余分に必要となるので、秋学期より学生数が多くなると教員が不足する恐れが出てくる。

当初より学期末にCourse Evaluationを学生に書いてもらい、教員の自己の教授法を反

省し研鑽する方法の1つとしている。

3.4 教室・施設

片鉾キャンパスは、82年に完成したメインキャンパスと道ひとつ隔てた3階建ての谷本国際交流会館が別科の建物であった。学生数200名まで十分対応できるよう考えていたが、88年春学期には200名に近づき90年春学期には200名を超えてしまい、学生数の急増に追いつかず、あっという間に手狭になった。LLを教室として利用したり、大きな講義教室を改造して教室数を増やしたり、2つのセクションの文法の講義クラスを合同で行うなど工夫して耐えていたが、2002年4月に現在の中宮キャンパスに移ってきた。今度はキャンパスの中に位置し、交換留学に関係する日本人学生だけでなく一般の日本人学生も気軽に出入りできるようになった。今回は学生数500名まで対応できるよう計画されているが、05年春学期には400名を超え手狭になり、500名を超えるのは時間の問題かと思われる。新しいコンピュータラボは、自習室(38台)1つ、クラス使用として(18台)を2教室、(30台)教室を1つ作った。各ラボのブースにはコンピュータの音声をMDとカセットテープに落として家へ持ち帰って練習できるようにしてあるが、今の学生はカセットプレーヤーはもちろんMDプレーヤーを持っていないので、せっかくの設備があまり活用されていないのは残念だ。教師が研究室のコンピュータで作成した教材をコンピュータラボに送ったり編集したり、自習室では学生が録音した練習を教師が研究室にいながらにして聞くことができる。コンピュータ教室は主に読み書きのクラスでワープロ指導、読解、速読、作文指導に使用されている。

各教室ではDVD、ビデオ、コンピュータの教材をプロジェクターで映し出し、コンピュータ、CD、MD、カセットテープの音教材も教室のスピーカーから流せる。パワーポイントを使用する教員が増えてきたため、コネクションやディスコネクションに時間を取られ、休憩時間が10分では短すぎるようだ。

3.5 学生の生活

住居の種類として、学生寮のセミナーハウス、日本人家庭の家に住むホームステイ、アパートや外国人専門の共同ハウスがある。当初セミナーハウスの収容人数が限られていたため、ホームステイの割合の方が多かったが、セミナーハウスが増棟されるにつれ、ホームステイの学生の割合が減り、セミナーハウスを希望する学生の割合が増えてきた。2005年夏第4国際交流セミナーハウスが完成し330人総定員になった現在、希望の学生

を収容できるようになってきた。現在各棟1～2名のRA(Residence Assistant)の日本人学生とルームメイトプログラムを希望する日本人学生と約300名の留学生がセミナーハウスに住んでいる。ホームステイとセミナーハウス、アパート(キャンパス外)に住む学生の割合は表6にしめす通りである。90/91年の資料が散逸しているので95/96年度、00/01年度、05/06年度の変化を見る。最近では、ホームステイでは食事が付いていて外食できない、自由な時間が取れない、通学時間、通学手段になれない等の理由でセミナーハウスを望む学生が増えている。

表6 学生の住居の種類と推移

		95/96	00/01	05/06
セミナーハウス	女	44	115	182
	男	39	128	160
	合計	83(24.3%)	243(41.7%)	342(51.2%)
ホームステイ	女	124	127	136
	男	91	121	166
	合計	215(63%)	248(42.5%)	302(45.2%)
アパート	女	23	35	6
	男	20	57	18
	合計	43(12.6%)	92(15.8%)	24(4%)
	総計	341名	583名	668名

3.6 教科書

初級会話用として84年度からAn Introduction to Modern Japanese(The Japan Times)を使用していたが、1995年に外大の留学生のニーズ分析を行い、『げんき』の試用版を作成し試用、改訂を繰り返し、1999年に出版された『げんき』I、IIをJPN1、2、3で使用している。中級用はJapanese For You(大修館)、An Introduction to Advanced Spoken Japanese(アメリカ・カナダ大学連合)、ELECの『日本語で話そう』(中級Vol. 1-2)を使用、92年からは独自の教材を開発、使用している。会話上級は、担当者が各自選択するため、一定ではないが今まで『自然な日本語』『自然な日本語II』(凡人社)、『どんな時どう使う日本語表現文型500』(アルク)『完全マスター1/2級日本語能力試験文法問題対策』、外大で作成されたものなど様々である。視聴覚教材としてはJPN3で『結婚シュミレーター』『サザエさん』JPN4では『シコふんじゃった』、上級クラスのJPN5では『Shall We ダンス?』を主に使っている。読み書き1、2、3は独自の教材を開発使用していたが、会話の教科書にあわせて『げんき』を使用することにした。読み書き4は

『日本語中級 301—基礎から中級へ—』（スリーエーネットワーク）、『読解をはじめるあなたへ』（凡人社）、その後外大で作成したものを使用している。読み書き5は『新聞で学ぶ日本語』（The Japan Times）、『日本社会探検』（スリーエーネットワーク）、『生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語 Authentic Japanese: Progressive from Intermediate to Advanced』（The Japan Times）『大学・大学院留学生の日本語②（作文編）』（アカデミック・ジャパニーズ研究会）など担当者がジャンルによって変えてきた。アカデミックジャパニーズの準備コースのニュースのコースでは生教材、Note-Taking では『大学・大学院 留学生の日本語 ③論文読解編』（アルク）、『留学生のための大学の授業へのパスポート』（凡人社）、『講義を聴く技術』（産業能率短大編）、論文の書き方では『大学生と留学生のための論文ワークブック』（くろしお出版）を使用している。

3.7 その他

3.7.1 問題の学生

3.7.1.1 障害をもつ学習者の受け入れ

欧米、特に米国の高等教育における障害を持つ学習者の増加に伴い、障害を持ちながら留学を志す学生が増加してきた。外大では数としては少ないが身体的、精神的、学習障害の学生が留学してくる。出来るだけ可能な受け入れはするが、物理的に無理な場合は受け入れられないと断っている。当大学の受け入れ側としてできる対応は次の通りである。

- ①必要であれば、授業をテープレコーダーで録音してもよい。
- ②試験の時、1.5 倍の時間があたえられる。
- ③チューターをつける。（日本語実習生やインターン候補生がチューターとなる）
- ④ローマ字で試験をうけてもいい。

その他、視覚障害の学生には、フォントを大きくしたり、緑色の用紙を試験用紙として用いる。車椅子の学生はキャンパス内の受け入れ態勢は出来ているが、住居の寮やホームステイとの通学の際、支援者が確保できないので、その問題が解決できれば可能である。鬱病、学習障害 (Learning Disability)などの精神的な障害の過去の履歴を願書に書いてくる学生は来日しても問題がない場合が多く、問題になる学生の履歴には何もない場合が多い。精神的障害を抱えている学生は留学してさらに症状が悪化することも多いので注意が必要だ。現在のところ民間の外国人対応のカウンセラーにつかせたり、客員教

授や各教員にクラスでの対応を任せているが、障害のある学生数がさらに増えた将来、英語が話せる専門カウンセラーの常設が必要となるであろう。

3.7.1.2 テスト時の不正行為

本国に別科の成績を持ち帰り卒業単位にするため GPA（成績の平均）を上げて就職を有利にしたい、次学期も継続して留別にいたいなどが GPA の点数が足りない、別科の奨学金をもらうために成績を良くしたいなどの理由で、特に読み書きの大きいクラスでテスト時の不正行為を行う学生も出てきた。カンニングやレポートの盗用に対する重大性を認識していない国民性もあるようだ。カンニングは教員が現場を見つけても、した、していないの水掛け論になり非常に後味の悪い結末になることが多い。日本語のプログラムとしては、不正行為を行えない環境を作って予防する次のような対策をとっている。机の間を離す；教科書、ノート、プリントをかばんにしまう；つばあり帽子をかぶらない；携帯電話はワープロ、辞書機能がついているため、切っておく；トイレに行く時も携帯を置いて行く。机に何も書いてないことを確認し、何か書いてあれば教員に知らせる；試験中はよそ見をせず、試験に集中する；といったことを学生に徹底させ、教員も机間巡視をするなどの予防策をとってからは、カンニングの報告が減った。

現在の学生は日本人学生に影響を受けてか、学生の 99% が携帯電話を持っているようだ。クラスでは必ず電源を切っておくように指示している。さもなければ、授業中、いろいろな音が響き渡る。欠席する場合、中間試験、期末試験を忘れた時、緊急の用事の時、連絡手段の 1 つであるのは便利なことである。

3.7.2 ポリシー

3.7.2.1 Japanese Only Policy

クラスの時間は限られているので、出来るだけ日本語使用を浸透させるべく、2002 年秋学期より Japanese Only Policy を作り、ガイダンス、シラバスにも記して日本語使用の徹底を図った。別科の館内の廊下やエレベーターで日本語教員と会った時に日本語を話さなくてはならず、クラスのパフォーマンスの成績にも影響する場合があるというものである。

本校は外大であるため、日本人学生は英米語、スペイン語を専門とし、留学生と話す場合、英語の練習にもなり、早くコミュニケーションが取れるので、英語になりがちである。日本人学生には、留学生と話す時は日本語と英語の半分半分で話すよう要望している。

3.7.2.2 Absence Policy

春学期に滞在を延長する学生は、日本語、日本の生活、大学の生活にも慣れて、どうしても緊張感がなくなり、新入生より出席率が低下する。新入生の中にも出席率を重視しない国、大学があり、出席率が悪い学生がいる。会話のクラスは特にペアワークやスキットを行い、読み書きのクラスでもグループプロジェクトを行う場合、他の学生に迷惑をかけるし、他の学生への学習意欲に悪影響を及ぼし、学生本人の日本語学習にも支障を来すため、ある割合を超えると、自動的に不合格の成績になるというルールを作り、2002年春学期にその割合を40%で始めた。効果はあまり見られず2004年春学期に30%に変更し、厳しくして初めて機能し始めたようだ。不合格の科目が1つでもあると次の学期への延長は原則認められなくなる。遅刻も3回で欠席1回と同じ扱いにし、クラス活動の中断を防いだり、学生共通の情報をもってもらうための手段である。

成績、出席状況、宿題の提出状況がよくない学生には、Academic Warning というレポートを教員が作成し教務部を通じて配られる。試験やクイズの結果が思わしくない、欠席が目立つ学生にはなんらかの修正を行わないとよい成績が取れないという警告のレポートを出している。それを機に真面目に勉強する学生もいる。

4. おわりに

思いつくまま、35年、特にこの15年をふりかえってみたが、学期が始まると毎日の雑事に忙殺され、学期が終わるとまた次の学期の準備に追われ、なかなか過去を振り返り過去のデータを分析することがなかった。記憶というものはまことにいい加減ですぐ消えていく。これからは定期的にデータを記し軌跡をのこしていくべきだと痛感した。この報告が他の別科や日本語教育機関の参考、ヒントになればよいと思う。

参考文献

- 大川英明・小山揚子・武田千恵子（1998）「Academic Japanese-学部授業履修に向けての支援プログラム-」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第8号 pp.1-42
- 小山揚子（1992）「関西外大の日本語教育—ここ10年の変容—」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第2号 pp.3-12

(shikaura@kansai.ac.jp)